

ニューマン理論に基づくミューチュアル・アクションリサーチを用いた 中国帰国者デイサービス・訪問介護職員と研究者の対話の過程

The process of dialogue with caregivers at Japanese returners from China senior day care center and home in utilizing mutual action research methodology within Newman's theory

○岡本陽子¹

Yoko Okamoto

1 所沢看護専門学校

Tokorozawa nursing school

【背景】

戦後75年が経ち、戦争被害者として中国残留孤児（以後、中国帰国者）について報道されることはもはや少なく、その言葉さえも知らない世代が多くなってきている。辛い経験を重ねて日本に帰還した中国帰国者に向けての施設が徐々に増えている現状があるが、その帰国者が抱える問題の1つとして、日本語に慣れないまま年老いていく人が多いことがあげられる。この現状にかんがみて、研究者は、研究協力が得られた施設の介護職員らとパートナーシップを組み、ミューチュアル・アクションリサーチ（以後、MAR）の手法を用いて、中国帰国者のためのデイサービス・訪問介護の施設の介護職員らが中国帰国者の故郷に見合うように、“介護職員自らが彼らの豊かな環境になる”という願いの実現を目指して、日々の介護の実践に関するグループ内対話を繰り返して、その過程に表れた彼らの認識と実践の変化を明らかにすることを目指した。

【目的】

中国帰国者デイサービス施設あるいは訪問介護施設の介護職員自身が、中国帰国者の故郷に見合うような豊かな環境になることを“願い”に掲げ、MARの方法論に基づき、研究者と介護職員らと対話を重ね、自己の介護のパターンを認識しながら、自分たちの願いを達成していく過程を明らかにする。

【方法】

全体性のパラダイムに準拠するM.ニューマンの健康の理論に基づき、研究者と介護職員らによるグループ内対話を通して、介護職員らが掲げた願いに向かって、自分の介護のパターンを認識し、それを変容させていくことを支援するMARの方法を用いた。参加した介護職員は4名。研究者と共に、介護職員が実施した介護とその内省を発表し合う対話を1年間8回繰り返した。データは、対話の逐語録、対話で共有するフィードバック資料、研究者のジャーナルであった。分析方法は、対話中にあらわれた介護パターンを抽出し、その過程に表れた変化の意味を明らかにした。ニューマン理論研究会でのスーパーバイズを受けた。所属の看護学校で倫理審査を受け承認（承認番号4）を得た。

【結果】

参加者4名は、互いの介護実践と自己内省についての対話を重ねることで、グループ内に相互作用が生まれた。例えば、A氏の介護パターンである“自分だけで頑張るパターン”を認識

し、その後そのパターンを手放した。そしてB氏が伝え続けていた家族を取り込んだ介護ということが、他の介護職員らに理解され、中国帰国者、その家族、そしてスタッフが互いに助け合い、困ったことを相談しながら作り上げる一致団結した大家族という環境作りが欠かせないのだという方向を見出した。

この過程での変化は、次の6つの局面として整理できた。局面1：施設でいま起こっている問題を、介護職員らの辛い体験として捉え、その問題の解決策の模索を始める。局面2：互いの介護実践を誠実に伝え合い、相互に作用し合う環境の重要性に気づいた対話が始まる。局面3：さらなる具体的事例についての対話から、ある介護職員の‘1人で抱え込む’介護パターンを認識した発言とそのパターンを手放し、そうではない行動への変化を報告し、過程のターニングポイントを迎える。局面4：参加者全員が、1人で抱え込むパターンを手放すことの重要性を認識し、中国帰国者、その家族、介護職員皆が互いに助け合い、‘家族のような’という介護の重要性に気づく。局面5：しかし、中国帰国者にとっての故郷となる環境になるという願いの具体性がつかめずに滞り、様々な方向へ模索する。局面6：滞りを乗り越えて、互いの変化を伝え合い認め合う仲間同志の対話から、自分たちならではの介護を創りあげようという“新たな願い”を掲げる。

8回の対話の会を終え、研究者と介護職員らは、困ったことを相談しながら作り上げる一致団結した‘大家族’という母国中国に類似した環境作りが欠かせないのだという方向を見だし、さらに、日本と中国の良いところを取り入れた、自分たちならではのケアに向かうことを自ら掲げるまでの過程が開示した。

【考察とまとめ】

ニューマン理論に導かれたMARの実践は、介護職員それぞれが介護パターンを認識し、自らが中国帰国者の故郷に見合う環境となろうという願いを創出し、その願いに向かって新たな介護、すなわち介護職員、中国帰国者、その家族が大家族をめざして実践するという介護の‘核’を見出した。この新たな介護のパターンを見出すには、対話が欠かせない。MARは、今後増加することが予想される中国帰国者を含む在留外国人が関連する多文化共生社会に対しても、役立つであろうことが示唆された。

【利益相反】

利益相反は無い。